

《資料》

食べ物の名数

(1) 五穀 (下) : 日本古典に見られる五穀

A Denominate Number for Food

(1) “Go-koku” (Five Main Cereals) (Part Two) : “Go-koku” Shown in Japanese Classical Literature

森田 潤 司
(Junji MORITA)

はじめに

前稿¹⁾では中国古典に見られる五穀の内容をまとめたので、本稿では日本古典に見られる五穀の内容をまとめる。中国と同様に日本でも主要な穀物を五でまとめて五穀とするが、その種類内容は定まっていない。日本においては、五穀は古くは「いつつのたなつもの」²⁾³⁾あるいは「いつくさのたなつもの」と呼んでいた。また、中国と同様に、穀物の総称としても五穀という語が使われた。たとえば、現存する我が国最古の医書で、丹波康頼が完成させた『医心方』(984年)⁴⁾⁵⁾は後述するように「五穀の部」に二十四種の穀物を挙げています。同書は中国古典の影響を受けていると思われるが、五穀の語は日常大切な食べものとしての穀物という意味で使われている⁶⁾⁷⁾。

日本での五穀

『日本書紀』(720年)神代上⁸⁾に「粟稗麦豆は陸田種子となし、稲を水田種子となす」とあるように²⁾、穀物を作付けで水陸二つに分類している。『日本書紀私記(乙本)』⁹⁾神代上の〈陸田種子〉の語注に〈波太津毛乃〉(はたつもの)とあり、『日本書紀』⁸⁾神代上の〈陸田種子〉には〈ハタツモノ〉、〈水田種子〉には〈タナツモノ〉と訓がある(注1)。五穀の呼び方については、『日本書紀私記(乙本)』⁹⁾神代上の〈五穀〉の語注に〈以豆豆乃太奈豆毛乃〉(いつつのたなつもの)とあり^{2) (注2)}、同様に『日本書

紀』⁸⁾神代上の〈五穀〉には〈イツノタナツモノ〉²⁾³⁾あるいは〈イツクサノタナツモノ〉²⁾と訓がある(注3)。『和名抄』¹⁰⁾(934年頃)でも〈日本紀私記云〉として、〈陸田種子〉を〈波多介豆毛乃〉(はたつもの)、〈水田種子〉を〈太奈都毛乃〉(たなつもの)と呼んでいる(注4)。「たなつもの」は、稲の種子、稲のことであるが、五穀としていうこともある。『和名抄』¹⁰⁾(934年頃)にも〈穀〉の和名に〈日本紀私紀云〉として「〈伊豆豆乃太奈都毛乃〉〈以都都乃太奈津毛乃〉いつつのたなつもの」と挙げる(注5)。

「たなつもの」の語源については『日本国語大辞典』²⁾が〈タネツモノ(種之物)の義〔箋注和名抄・名言通・和訓栞・大言海〕。タネツモノ(子物)の義〔言元梯〕。タノツクリモノ(田之作物)の義〔日本語原学=林堯臣〕。田津物の義〔雅言考〕など諸説がある」と諸説を記している。

五穀の起源の記述

五穀の起源について、日本では『古事記』(712年)と『日本書紀』(720年)で語られている。

『古事記』¹¹⁾では、速須佐之男命はやすさのおのみことに千位ちぐら置戸おきとを負わせて高天原を追放したとき、命がみこと大気都比売神おおけつひめのみかみに食を求めた。女神が鼻、口、尻からいろいろな味物あじもの(おいしい食べ物)を出して取り出しているところ、速須佐之男命はそのしわざを立ち伺っており、穢した物を供したと思つて怒り、大宜津比売神を殺してしまった。ところが神の頭かみこに蠶はとが生じ、両眼に稲種、両耳に粟、鼻に小豆、陰に麦、尻に大豆が生じた。これを神産巢日御祖命が取つて種としたのが五穀・養蚕

食べ物の名数

の始めである、と記す。

『日本書紀』では二箇所です。まず『日本書紀』⁸⁾12(巻第一 神代上 第五段の第二の一書)では、伊弉冉尊が火の神・軻遇突智を生んだことによって死ぬ。その間に臥しながら土の神・埴山姫と水の神・罔象女を生む。やがて軻遇突智は埴山姫を娶り、埴山媛と軻遇突智の間に稚産霊が生まれたとする。そしてこの神の頭の上に蚕と桑とができ、臍の中に五穀ができたとしている。一方、同書⁸⁾12(巻第一 神代上 第五段の第十一の一書)では、天照大神が葦原中国に保食神がいるから行って見てくるようにと月夜見尊を派遣すると、保食神が口からさまざまな食物を出してもなした。怒った月夜見尊は保食神を殺した。その報告を聞いて天照大神は怒り、顔も見たくないと、月夜見尊と昼夜を隔てて離れてお住みになった。この後、天照大神が天熊人を遣わして看ると、保食神はすでに死んでいたが、その頂きに牛馬が自然にできており、額の上に粟、眉の上に鹽、眼の中に稗、腹の中に稲、陰部に麦と大小豆が生えた。天熊人がこれらを残らず持ち帰って献上すると、天照大神は喜ばれて、これらのものはこの世に生きる人民が食べて生活すべきものであると仰せられて、粟・稗・麦・豆を陸田種子とし、稲は水田種子として天呂君(農民の長)を定めた、と記す。

『古事記』の大気都比売神も『日本書紀』の稚産霊や保食神とともに食物の神である。食物となる五穀は毎年刈り取られるものであるから、大気都比売神あるいは保食神は速須佐之男命あるいは月夜見尊によって伐られねばならなかったのである。榎⁴⁾は、月夜見尊は「月読み」すなわち暦を司る神であって、この神に刈り取れるのは五穀の運命であるという。

五穀の内容

前述したように、五穀豊穰、五穀潰し、五穀の神などというときの五穀という語は穀類の総称であり、日常主要な食べ物の意である。平安時代、丹波康頼により朝廷に献上された『医心方』(984年)食養篇⁴⁾5)では五穀の部に胡麻を筆頭に24種の食物を挙げている。ちなみに、その食物は胡麻(胡麻、ゴマ)・大豆(末女、マメ)・赤小豆(阿加阿ツ支、アズキ)・白角豆(志呂佐々介、シロササゲ)・大麦(不止牟支、オオムギ)・横麦(加知加多、カラスムギ)・小麦(己牟支、コムギ)・蕎麦(曾波牟支、ソバ)・青粱米(安波乃与祿、アワ)・黄粱米(キビ)・白粱米(之呂阿波、シロオオアワ)・粟米(阿波乃宇留之祿、オオアワ)・秬米(阿波乃毛知、モチアワまたはモチキビ)・丹黍米

(阿加支支美、アカキビ)・稷米(支美乃毛知、ウルチキビ)・粳米(宇留之祿、ウルチゴメ)・稻米(以禰之与禰、コメ)・糯米(毛知之与禰、モチゴメ)・糜米(以禰乃毛也之、イネのモヤシ)・糝(阿女、アメ)・酒(佐介、サケ)・酢酒(須ス)・醬(比之保、ヒシオ)・塩(之保、シオ)(注:括弧内は和名と植物名)である。

日本で五穀あるいは五種として穀物を挙げる場合も、その内容は時代により諸説ある。以下に時代順に挙げる。

- ①『古事記』¹¹⁾(712年)は稲・粟・小豆・麦・大豆。
- ②『日本書紀』¹²⁾(720年)神代上は、粟・稗・稲・麦・大豆小豆。または、粟・稗・麦・豆・稲。
- ③『令集解』¹³⁾(868年頃)は〈鄭玄云〉として『周礼』夏官天職方氏五種の鄭玄注¹⁴⁾に倣って「五種」に、黍・稷・菽・麦・稻を挙げる^(注6)。
- ④『和名抄』¹⁰⁾(934年頃)穀の項は〈周礼注云〉として五穀に黍・稷・菽・麦・稻を挙げる。これもまた、『周礼』夏官天職方氏五種の鄭玄注¹⁴⁾に倣ったものである^(注7)。また〈礼記月令注云〉として稷・麻・豆・麦・黍^(注8)を挙げる^(注9)。
- ⑤平安時代末期成立の古辞書『色葉字類抄』¹⁵⁾(1144年~1181年)は三説を挙げる。黍・稷・アハ・マメ・ムギ・稲、また稷・麻・豆・麦・禾を挙げ^(注10)、さらに〈異本云う〉として稲穀・大麦・小麦・大豆・小豆を挙げる⁶⁾。
- ⑥鎌倉時代の類書『拾芥抄』¹⁶⁾(1340年頃)は稲穀・大麦・小麦・大豆・小豆を挙げる^(注11)。他に諸説を挙げる。稲穀・大麦・小麦・大豆・胡麻、あるいは麦・黍・米・粟・大豆、あるいは稲穀・大麦・小麦・菘豆・胡麻、あるいは粳米・麻・大豆・小豆(麦)・黄黍である。
- ⑦室町時代の古辞書『下学集』¹⁷⁾(1444年頃)は、粟黍類・稲糯類・豆類・麻・麦^(注12)を挙げる。
- ⑧同じく室町時代の辞書『運歩色葉集』¹⁸⁾¹⁹⁾²⁰⁾(1547年頃)五穀の語注記は、写本により、語順が異なるが、粟・黍・豆・稲糯・麦・麻を挙げる^(注13)。
- ⑨古辞書『節用集』は写本により五穀の語注記を欠くものや五穀の項を欠くものもあるが、伊勢本系の『広本(文明本)節用集』(注:『雑事類書』ともいう)²¹⁾(室町時代中期写)は、粟黍類・稲糯類・豆類・麻・麦である^(注14)。乾本系の『易林本節用集』²²⁾²³⁾(慶長二年[1597年]原刻本)は、米・大麦・小麦・大豆・小豆 あるいは黍・菽・麦・粟・稻を挙げる。
- ⑩『庭訓往来注』^{24a,c)}は『庭訓往来』²⁴⁾三月七日〔旧注

「三日」]の状の「蕎麦、大豆、小豆、大角豆、黍、粟、麦、稗等」の麦稗等に注して、楊泉『物理論』を引いて、五穀は、黍・稷・麦・稻・麻（胡麻）なりとする（注15）。

- ⑪『名数語彙』²⁵⁾（室町末期写）五穀は、粟黍類・糯稻類・豆類・麻・麦（注16）とあり、『下学集』や印度系節用集と類似している。
- ⑫近世初頭成立とみられる新本『清良記－親民鑑月集－』²⁶⁾（1628年）は、米・大麦・小麦・大豆・小豆及び粟・秬・大豆・麦・稻を挙げる（注17）。
- ⑬近世節用集の代表格である、『合類節用集』²⁷⁾（1680年）は、米・大麦・小麦・大豆・小豆、また黍・菽・麦・粟・稻、また黍・菽・麻・麦・稻、また粟黍類・稻 糯類 豆類・麻類・麦類と諸説を列挙している。『書言字考節用集』²⁸⁾（1717年）は、五穀 麻・黍・稷・豆・麦、また稻・麻・粟・麦・豆を挙げる（注18）。
- ⑭『本朝食鑑』（1695年）²⁹⁾穀之一 稲は〔集解〕で、三穀（梁・稻・菽）及び九穀（稷・秬・黍・稻・麻・大豆・小豆・大麦・小麦）とともに五穀として、麻・黍・稷・麦・豆を挙げる。これも『周礼』天官疾醫における鄭玄の注¹⁴⁾に従ったものである。また、わが国で昔から五穀と呼んできたものとして稻・大麦・小麦・大豆・小豆並びに麦・黍・米・粟・大豆を挙げる。これらは、『拾芥抄』¹⁶⁾に従ったものである。
- ⑮『大和本草』³⁰⁾（1709年）は、五穀として禾・麻・粟・麦・豆を挙げる（注19）。他に月令の黍稷麻麦豆、孟子の註の黍稷菽麦稻、楚辭の註の稻稷麦豆麻を挙げる。
- ⑯『日葡辞書』³¹⁾（1603-1604年）には、〈「Gococu, ゴコク（五穀）五つの種子、または穀物。すなわち、Come, mugui, aua, qibi, fiye.（米、麦、粟、黍、稗）米、小麦・大麦、粟、黍、および黒い色をした一種の黍」とあり、豆や麻を含まない。
- ⑰『和漢三才図会』³³⁾（1712年頃）は、五穀に麻・黍・稷・麦・豆を挙げる。『周礼』¹⁴⁾天官疾醫における鄭玄の注に従ったものである。また、「今いう」として稻・

大麦・小麦・大豆・小豆を挙げる（注20）。こちらは『拾芥抄』¹⁶⁾に従っている。

- ⑱明治初期の『増訂 農業往来』³⁴⁾（1873年）は黍アワ・稷キビ・菽マメ・麦ムギ・稻コメを挙げ、『増補 訓蒙農業往来』³⁵⁾は、黍・稷・菽・麦・米を挙げる（注：訓は原文のママ）（注21）。

表1はこれらをまとめたものである。その他、『廣文庫』³⁶⁾や『類聚名物考』³⁷⁾などに諸説が挙げられている。

『古事記』¹¹⁾や『日本書紀』¹²⁾の神話は、日本で奈良時代までに粟・稗・稻・麦・大豆・小豆の穀物が栽培され食生活で重要な穀物であったことを示す。

このうち、ヒエ（稗）*1についてみると、『日本書紀』は稗をあげるが、『古事記』¹¹⁾では稗は省かれている。鈔方『日本古代穀物史の研究』⁵⁾や廣野『食の万葉集－古代の食生活を科学する－』³⁸⁾は、神饌用の稗田と関係すると見られる稗田阿礼が口述したにもかかわらず、『古事記』で稗が省かれているということは、この頃には稗が主穀ではなくなったことを示すものであろう、『日本書紀』に稗が挙げられるのは、稗が主穀であった時代を伝承するものである、と論じている。『万葉集』³⁹⁾に

打つ田に稗はあまたも言へど 選られし我そ夜をひとり寝る

（耕した田に稗は沢山あるというのに、選って捨てられた私は夜ひとり寝ている。）（巻十一－二四七六）

水を多みに上種時き稗を多み選らえし業ぞ我がひとり寝る

（水が多いので、高い田に初を蒔いたら、肝心の稲よりも混じていた稗の方が多いので、抜き捨てられたようなものだ、私がひとり寝るのは。）（巻十一－二九九九）

と歌われているように、万葉の時代では水田の雑草として稗が抜き取られている。しかしながら、水田に恵まれない地域では 繁殖力の強い稗はあいかわらず重宝されたと推測される⁷⁾⁴⁰⁾。『正倉院文書』⁴¹⁾天平六年尾張国正税帳や『延喜式』⁴²⁾巻二では尾張国から稗五石が貢納されているが、その量はなぜか他の穀類に比べて非常に

表1 日本古書に見る五穀の内容（番号は記載順を示す）

	麻	黍	稷	稗	菽・豆	麦	稻・禾	粟	備考
『古事記』					③小豆 ⑤大豆	④	①	②	
『日本書紀』（720年）神代卷				②	⑤大小豆	④	③	①	
				②	④豆	③	⑤	①	
『令集解』（868年頃）		①	②		③菽	④	⑤		五種 （周礼云穀宜五種、鄭玄云）

食べ物の名数

『和名抄』		①	②		③菽	④	⑤		(周礼云) 実は『周礼』夏官天職方氏五種の鄭玄注に倣う
	②	⑤	①		③菽	④			(月令注云)
『色葉字類抄』(1144年～1181年)		①黍(キビ)	②稷(アハ)		③菽(マメ)	④麦(ムギ)	⑤禾(イネ)		
	②		①		③豆	④	⑤禾		
『拾芥抄』(下)					④大豆⑤小豆	②大麦③小麦	①稲穀		(異本云う)
					④大豆 ⑤胡麻	②大麦③小麦	①稲穀		(内法之時常止二小豆一加二胡麻)
		②			⑤大豆	①	③米	④	(近代用二此等一)
	⑤胡麻				④菽豆	②大麦③小麦	①稲穀		(或止二大豆小豆一加二菽豆胡麻一云云、諸家説不同也)
	②麻	⑤黄黍			③大豆	④小豆あるいは麥	①粳米		
『運歩色葉集』『古』部	⑥	②			③豆	⑤	④稲糯	①	写本により、語順が異なるが6種
『下学集』	④麻(アサ)				③豆(マメ)類	⑤麦(ムギ)	②稲糯(ウルチゴメ)類	①粟黍(アワヒエ)類	
『文明本節用集』	④麻(アサ)				③豆類	⑤麦(ムギ)	②稲糯類	①粟黍(アワキビ)類	
『庭訓往来抄』『庭訓往来注』	⑤胡麻	①	②			③	④		
『名数語彙』	④麻				③豆類	⑤	②稲糯類	①粟黍類	
『清良記 - 親民鑑月集 -』(1628年)					④大豆 ⑤小豆	②大麦 ③小麦	①米		
		②秬			③大豆	④	⑤稲	①	
『合類節用集』	①	②	③		④豆	⑤麦			
		①黍(キビ)			②菽(マメ)	③麦(ムギ)	⑤稲	④粟(アハ)	
	③麻(アサ)	①黍(キビ)			②菽(マメ)	④	⑤稲		
	④麻類				③豆(マメ)類	⑤麦類	②稲糯(ウルチゴメ)類	①粟黍(アワヒエ)類	
『書言学節用集』	①	②	③		④豆	⑤			
	②				⑤豆	④	①稲	③	
『本朝食鑑』	①	②	③		⑤豆	④			『周礼』天官疾醫における鄭玄の注に従ったもの
					④大豆 ⑤小豆	②大麦 ③小麦	①稲		『拾芥抄』に従ったもの
		②			⑤大豆	①	③米	④	『拾芥抄』に従ったもの
		②秬(くろきび)			③大豆	④	⑤	①	
『大和本草』	②				⑤豆	④麦	①禾	③	
『日葡辞書』(1603-1604年)		④キビ		⑤ヒエ		②ムギ	①コメ	③アワ	
『和漢三才図会』	①	②	③		⑤豆	④			『周礼』天官疾醫における鄭玄の注に従ったもの
					④大豆 ⑤小豆	②大麦 ③小麦	①稲		(今云)
『増訂 農業往来』(1873年)		①アハ	②キビ		③菽(マメ)	④麦ムギ	⑤稲コメ		

少ない⁷⁾⁴⁰⁾。『延喜式』⁴²⁾卷四十主水司をみれば、七種粥の材料に稗が挙げられており⁴³⁾、奈良時代でも儀式用の食物として稗が用いられていることがわかる。これも稗が古代の主穀であったことを伝承するものであろう。近世農書を代表する『農業全書』⁴⁴⁾では稗には田稗と畑稗の二種類があり、稗は最も下等な穀物ではあるが貧民を救い、農家に利益をもたらす作物であると指摘している。

次に、キビ(黍)についてみると、『令集解』¹³⁾に黍・稷・麥・稻と黍の記載があることは日本で奈良時代から平安時代にかけて黍の栽培が本格化したことを示すものであろう。

アワについてみると、『拾芥抄』¹⁶⁾の五穀に粟がないことはアワも貴族世界では平安時代末から鎌倉時代の頃に主穀ではなくなったことを示す³⁸⁾。『本朝食鑑』²⁹⁾や『和漢三才図会』³³⁾の五穀にアワがない。『本朝食鑑』²⁹⁾や『和漢三才図会』³³⁾の五穀にアサが挙げられるが、『本朝食鑑』²⁹⁾は麻の項目は立てていないし、『和漢三才図会』³³⁾は大麻の項でこれは薬用としている。

江戸時代以後、おもに稲(米)・黍・粟・麦・豆を五穀と呼ぶことが多い²⁾³²⁾が、『日葡辞書』³¹⁾の五穀に米、麦、粟、黍、稗とアワ、キビとともにヒエが挙げられるのは、江戸時代でも、水田の乏しい土地の住民にとってアワ、アサ、ヒエは依然として重要な穀物であったことを示している。一方、『農業全書』⁴⁴⁾(1697年)は五穀之類に、稲、菴稻、麦、小麦、蕎麦、粟、黍、蜀黍(たかきび)、稗、大豆、赤小豆、菜豆(ぶんどう)、蚕豆、豌豆、豇豆、扁豆(あぢまめ)、刀豆、胡麻、意苳(くすだま)を挙げ、アワとヒエを含めた19種を挙げているがアサを挙げない。

おわりに

五穀の指す内容は時代や地域によって一定しない。五穀の指す内容に諸説があるのは、地域や時代による代表的な主食である穀物の生産状況、人びとの食生活に対する意識の違いを反映しているものと考えられる。現代日本では、五穀の内容は米・麦・粟・豆・黍または稗を指すことが多く²⁾⁴⁵⁾。麦は大麦と小麦を含み、豆は大豆と小豆を含む。米以外の穀物は雑穀とされるが、栄養価の面から捨てがたいものがある。そこで、五種をブレンドした米を五穀米と呼ぶものが販売されていたりする。

ところで前述したように『周礼』天官疾醫¹⁴⁾に〈以五味五穀五菜 養其病〉(五味五穀五菜を以て其病を養う)とある。また、現存する我が国最古の医書で、丹波康頼が

永観二年(984年)に完成させた『医心方』²⁾には〈大素経云五穀爲養五果爲助五畜爲益五菜爲埤〉(大素経にいう。穀物は人の生命を養う栄養であり、果物は穀物の栄養を補い、肉類は穀物の栄養の働きを高め、野菜は穀物の栄養を増進させるものである。)と書かれている。中国古代から、またこれを受けて奈良平安時代から、すでに栄養学の知識があったことは注目すべきである。大素経の五穀五畜五菜五果の分類は現代の栄養学でいうなら「三色食品群」の分類に近い。五穀は黄群(力や体温となるもの)の糖質食品、五畜は赤群(肉や血をつくる)のたんぱく質食品、五菜と五果は青群(からだの調子をよくするもの)のビタミンや無機質を多く含む野菜や木の実ということになる。

『医心方』⁴⁾はこの項の「注に云う」では、続けて「穀類、畜肉類、果物類、野菜類は、これらを用いて飢えをみたすときには、これを食物というが、これらを用いて、病気の治療をするときには、これを薬という」と記している。まさに医食同源、薬食同源の考え方である。

五穀の植物の注

穀、黍、稷、粱、秫、菽、豆、麦、稻、麻、粟、禾、粳米、黄黍、菜豆、白芥子、胡麻については前稿¹⁾に注をつけた。各穀物の別称や出典については『本草綱目啓蒙』⁴⁶⁾や『草木名彙辞典』⁴⁷⁾にも詳しい。

*1 稗

ヒエ。『和名抄』¹⁰⁾の和名に〈比衣〉とある²⁹⁾⁴⁰⁾⁴³⁾。「稗」の字をあてることもある⁴⁸⁾。『本草綱目啓蒙』⁴⁶⁾卷之十九穀之二は稗子をヒエ(鴨脚稗)、稗子をノビエとしている。

引用文献及び注 (注: 以下アンダーラインは著者)

(注1)『日本書紀私記(乙本)』⁹⁾神代上に、

為陸田種子 波太津毛乃止須

とある。

『日本書紀』²⁾⁸⁾(720年)神代紀・上にも

乃^{アハヒエムギマメ}以^{ハタツモノト}粟^{ハタツモノト}稗^{ハタツモノト}麦^{ハタツモノト}豆^{ハタツモノト}為^{イネ}陸田種子。以^{イネ}稻^{ハタツモノト}為^{イネ}菴^{ハタツモノト}。ハタケツモノト【吉】ハタケノタナツモノト【丹】

タナツモノト
水田種子

ミズ【熟】

と訓がある。

(注4)『十卷本 和名抄』^{10a)}卷九 稻穀具百十五に

種子 日本紀私記云、水田種子、太奈都毛乃 陸田種子、波太介豆毛乃、種之隔反太彌

とある。

(注2)『日本書紀私記(乙本)』⁹⁾神代上に

五穀 以豆乃太奈豆毛乃

とある。

(注3)『日本書紀』⁸⁾神代上に

此ノ神ミノ頭ヲ上ヘニ生ニ蚕ト 與ニ桑。臍中ガニ生ニ
ナレリカイコ ト タハ ホゾノ ナレリ
イツ、ノタナツモノミノラズシ(前)
 五 穀 (水戸本訓)²⁾

と訓があり、

同書⁸⁾ 卷十一 仁徳天皇・四年丙子に

ノタナツモノミノラ
 五 穀 不 登テ
イツ、ノタナツモノミノラズシ(前)
ユタカナリ
 五 穀 豊穰
タナツモノ(前)

と訓がある。

同じく、同書⁸⁾ 卷十二 反正天皇・元年に

五 穀 成就 (圖書寮本訓)⁴⁹⁾

と訓がある。

同書 卷十二 推古天皇・二五年には

是歳、五の穀 登之 (岩崎本訓)⁵⁰⁾ (圖書寮本
 訓)⁴⁹⁾⁵¹⁾

と訓がある。

(注5)『和名抄』(京本)^{10a, c, e)52)} (十卷本)には

穀 周禮注云、五穀 古祿反 日本紀私記云 伊豆々
 乃太奈都毛乃 黍稷菽麥稻也 禮記月令注云稷麻
 豆麥黍也

とある。

『和名抄』(天文本)^{10d)} (下総系写本 十卷本)には

穀 周礼注云一 古祿切 日本紀私記云
 伊以豆乃太南毛美 禾黍之惣名也 黍稷菽麥稻也
 礼記月令注云稷麻豆麥黍也

とある。

『和名抄』(元和本) (下総本)^{10b, c)} (二十卷本)には

穀 周禮注云五穀 音谷和名毛美
 日本紀私記云五穀以都々乃太奈豆毛乃 今案五穀一説云
 稷麻豆麥黍也見禮記月令注 禾稷菽麥稻也

とある。

(注6)『令集解』¹³⁾第十二に

田 謂。田所_三以殖_二五穀_一之地。(中略)周礼云
 穀宜_二五種_一。鄭玄云。五種。黍稷菽麥稻也。

とある。

(注7)『和名抄』^{10a, c, e)52)} (十卷本)は(注5)のように

「穀 周礼注に云う。五穀、(中略)日本紀私記云う
 伊豆々乃太奈都毛乃。黍稷菽麥稻也。礼記月令注に
 云う。稷麻豆麥黍也。」と記す。なお、刈谷椽齋⁵²⁾
 は『箋注倭名類聚抄』で次のように強調している。

「原書周礼疾医の五穀の鄭玄の注は麻黍稷麥豆であ
 って、此処と和名抄が引く所とは異なっている。周
 礼夏官天職方氏の五種についての鄭玄の注が黍稷菽
 麥稻であり、これと合致する。鄭玄が五穀と五種に
 別個に注しているのは五穀と五種が同じではないか
 らである。源順が周礼注を引いて黍稷菽麥稻を五穀
 とするのは誤りである。」

また、刈谷『箋注倭名類聚抄』⁵²⁾は「後漢書明帝
 紀の注が鄭玄の周礼注を引いて五穀を黍稷麥麻米と
 するのも亦恐らく誤り」といっているが、これは刈
 谷の間違い。刈谷は〈米〉をイネとしているようだ
 が、「ホ」を〈米〉と誤書写した本を見たものと推
 測される。原書注は「黍稷麥麻ホ」である(注22)。
 「ホ」は「米」ではなく「豆」のことで、これなら
 鄭玄の周礼注の稷麻豆麥黍と合致する。

刈谷⁵²⁾は、『和名抄』が五穀の種類について五種
 のものと誤った記載をしている理由について、大載
 禮注や漢書注の五穀は周礼疾医注に同じだが、孟子
 注、淮南子注、後漢書班彪傳注が皆「黍稷菽麥稻」
 を以て五穀としていること、『史記』の黄帝「五種
 を藪^{うえる}」の文の【索隱】に「五種は即ち五穀也」とあ
 り、顔師古も『漢書』食貨史に「五種は即ち五穀
 也」と注していることから、『和名抄』著者の源は
 これらの書を渉り誤ったのだらうと指摘している。

(注8)『和名抄』(京本)^{10a, c, e)52)}や『和名抄』(下総本
 系天文本)^{10d)}などは〈月令注云稷麻豆麥黍也〉と
 「黍」ではなく「禾」になっている。「元和古活字
 本」^{10b, c)}は〈月令注云禾稷菽麥稻也〉となっており、
 語順も異なる。狩谷『箋注倭名類聚抄』⁵²⁾は、和名
 抄の舊本(福井本・下総本・廣本)は稷麻豆麥黍の
 黍は禾に作ると指摘している。『和名類聚抄』の文獻
 学的研究⁵³⁾も、「京」、「松」、「高」は「黍」を
 「禾」に誤り。)としている。「黍」が正しい。「禾」
 はアワ、イネあるいは穂を垂れた穀物の総称であ
 る。

(注9)狩谷『箋注倭名類聚抄』⁵²⁾がいうように、『礼
 記』⁵⁴⁾月令には五穀が五回出てくるが、五穀につい
 て鄭玄などの注はないので、『和名抄』の〈禮記月
 礼注云 稷麻豆麥黍〉の記載は誤り。狩谷『箋注倭
 名類聚抄』⁵²⁾は、『礼記』月令には天子が明堂で月次
 の祭式では「春は麦を食し、夏は菽を食し、中央は
 稷を食し、秋は麻を食し、冬は黍を食す」ことが記
 されているので⁵⁵⁾、ここは是を引いたものであろう
 とする。『呂氏春秋』⁵⁶⁾十二紀で 天子が明堂で月次

の祭りで食する穀も同じく「稷麻豆麦黍」である。

(注10) 『日本語大辞典』²⁾五穀の【語誌】に

日本では、「色葉字類抄」に「五穀〈略〉黍、稷、菽、麦、稻也〈略〉又云稷、磨、豆、麦、禾也」とある。

と記されているが、ここの「磨」はおそらく「麻」の誤りである。『色葉字類抄 三卷本』^{15a)}飲食を見ると

五穀 (略) 黍 稷 菽、麦、稻也 又 稷 豆 麦 磨 禾也)

とあり、この写本では「磨」と見えるが、『色葉字類抄 二卷本』^{15b)}飲食では、

五穀 黍 稷 麻 麦稻 或 稷 麻 豆 黍 禾

であり、他の『色葉字類抄 三卷本』^{15c)}飲食でも

五穀 黍 稷 菽、麦、稻 或云又 稷 豆 麦 麻 禾也

とある。

(注11) 『拾芥抄』(下)¹⁶⁾

五穀 稻穀 大麥 小麥 大豆 小豆 内法之時常止_二小豆_一加_二胡麻_一云云

或 麥 黍 米 粟 大豆近代用_一此等_二由_一。光平所_レ令申_レ院也。移徒之時用_レ之

或 止_二大豆 小豆_一加_二菘豆 胡麻_一云云、諸家説不同也、

或 粳米甘 麻酸 大豆鹹 小豆苦或麥 黄黍辛 九穀 稗 稻 黍 米 菽麻 大豆 小豆 大麥

(注12) 『下学集』¹⁷⁾【数量門】に

五穀 一_ニ粟黍類 二_ニ稻糯類 三_ニ豆類 四_ニ麻アサ 五_ニ麦 是也

とある。『増刊下学集』⁵⁹⁾には語注記がない。

(注13) 『運歩色葉集』¹⁸⁾¹⁹⁾²⁰⁾「古」部 五穀の語注記

は六種の穀を挙げる。

五穀 粟 黍 豆 稻糯 麥 麻 [『元龜二年本』¹⁸⁾ (1571年)]

五穀 粟 黍 豆 稻糯 麥 麻 [『静嘉堂本庫本』¹⁹⁾]

五穀 粟 黍 豆 麥 麻 稻糯 [『天正十七年本』²⁰⁾ (1589年)]

(注14) 古本節用集には異本群として伊勢本・印度本・乾本があるが、最古とされる伊勢本系節用集の『広本(文明本)節用集』(『雑字類書』)²¹⁾(室町時代中期文明六年〔1474年〕書写)【数量門】には

五穀 神農始作 一_ニ粟黍類 二_ニ稻糯類 三_ニ豆類 四_ニ麻 五_ニ麥 是也

とあり、語注記の穀類は『下学集』と同じで、「神農始めて作ル」の注記を増補している。また、別に「稷五穀之長也」とあるが、数量門の五穀には稷を挙げていない。

伊勢本系の、『伊京集』²²⁾(室町時代書写)、『明応五年本節用集』²²⁾(明応五年〔1496年〕書写)及び『天正十八本節用集』⁵⁷⁾⁵⁸⁾(天正十八年〔1590年〕書写)には五穀はあるが語注記がない。また、『饅頭屋本節用集』²²⁾(室町時代末期書写)は穀はあるが、五穀を欠く⁵⁷⁾。なお『天正十七年本節用集』⁵⁹⁾(天正十七年〔1589年〕書写)には

五穀 一粟 黍類 二稻糯 三豆類 四麻類 五麦類 是也

と語注記がある。

印度本系の節用集では

五穀 一粟 黍類 二稻糯(モチイ) 三豆類 四麻類 五麦類 是也 [『弘治二年本節用集』⁶⁰⁾

(弘治二年〔1556年〕書写)草木]

五穀 一_ニ粟黍類 二_ニ稻糯類 三_ニ豆類 四_ニ麻類 五_ニ麦類也 [『永祿二年本節用集』⁶⁰⁾

(永祿二年〔1559年〕書写)草木]

五穀 一_ニ粟黍類 二_ニ稻糯類 三_ニ豆類 四_ニ麻類 五_ニ麦類。 [『堯空本節用集』⁶⁰⁾(永祿八年〔1565年〕頃)草木]

とある。『両足院本節用集』⁶⁰⁾(慶長十五年〔1610年〕頃書写)は五穀の項を欠く。また、黒本本節用集(室町末期書写)²²⁾⁵⁷⁾に穀はあるが、五穀を欠く。

乾本系の『易林本節用集』²²⁾²³⁾(慶長二年〔1597年〕原刻本)【数量門】では

五穀 米 大麥 小麥 大豆 小豆 又云黍 菽 麥 粟 稻

とある。

(注15) 『庭訓往来』^{24a)}三月七日〔旧注「三日」〕の状では、「蕎麦、大豆、小豆、大角豆、黍、粟、麦、稗等」と五穀なぞっている。写本^{24b)}により「蕎麦・麦、大豆・小豆・大角豆・粟・黍・稗等」とあるなど組み合わせや語順が異なる。

『庭訓往来抄』^{24a)}によると、『庭訓往来抄』

には〈麦稗等〉に注して

五穀ハ楊泉物理論ニ曰ク、黍、稷、麦、稻、胡麻也。穀ハ実也。続也、命ヲ続(ツグ)ト云ふ也。

とある。

『庭訓往来注』^{24c)}には

五穀^{コク}楊泉^{コメ}物理論^リ曰^ク、黍^{キビ} 稷^ヒ 麦^{ムギ} 稻^{コメ}子
麻也 穀^{コク}実也 續也 続^ツ命^{メイ}云也

とある。麻の植物名にはアサ（麻）とゴマ（胡麻）の説があったことがわかる。

(注 16) 『名数語彙』²⁵⁾に

五穀 一粟黍類 二糯稻類 三連豆類 四麻
五麦也。

(注 17) 『清良記－親民鑑月集－』²⁶⁾

米, 大麦, 小麦, 大豆, 小豆, 是を指出して五
穀と申候, 粟, 秬, 大豆, 麦, 稲是をも五穀と
申候 (注: 秬はクロキビである。)

(注 18) 『合類節用集』²⁷⁾巻七〔数量部〕

五穀 米 大麦 小麦 大豆 小豆 又黍 菽
麥 粟 稻 又黍 菽 麻 麥 稻 又粟黍類
稻 糯類 豆類 麻類 麥類

『和漢音積書言字考節用集』²⁸⁾ 卷十〔数量門〕

五穀 麻・黍・稷・豆・麥 稻・麻・粟・麥・
豆

(注 19) 『大和本草』³⁰⁾巻之二 論用薬

五穀 禾 麻 粟 麥 豆【素問藏氣法時論^一
日五穀為^レ養^二五畜為^レ益^一五菜^ヲ為^レ充^二五果^ヲ為^レ
助○月令以^二黍稷麻麥豆^一為^レ五穀^ト 孟子^ノ註^ニ
以^二黍稷菽麥稻^一為^レ五穀^ト 楚辭^ノ註以^二稻稷麥豆
麻^一為^レ五穀^ト】

(中略)

八穀 稻穀大豆小豆大麦小麦粟麻【小學紺珠】

○日本紀神代卷^ニ稻妻大豆粟稗^ヲ

記^ス是上古^{ヨリ}我邦^ニ所^レ在也日本紀欽明天皇十二
年麥種一千斛^ヲ賜^リ百濟^ニ可^ク 見^ル自^レ上世^ニ有^リ

此種^上也

九穀 稷 秬 黍 稻 麻 大豆 小豆 大
麥 小麦【周禮鄭玄註】(注: この書の「鄭玄註」
は「鄭衆註」の記述誤り。)

(注 20) 『和漢三才図会』³³⁾巻第三百 穀菽類

五穀とは麻・黍・稷・麦・豆

九穀とは秬・稻・小麦・小豆〔右の五穀に以上
を加えて九穀という〕

三穀とは粟・稻・菽

〔今いう〕五穀とは稲・大麦・小麦・大豆・小
豆である。

(注 21) 『日本国語大辞典』²⁾に

明治六年（一八七三）版の『農業往来』は、米

・大麦・小麦・大豆・小豆を挙げ、また「一説
には」として稲・麦・菽・粟・黍を挙げる。

とあるが、国立国会図書館近代デジタルライブラリ
一所収の明治六年刊行『農業往来』諸本ではこうした
記載はない。

(注 22) 『後漢書』⁶¹⁾本紀一 顯宗孝明帝 紀第二に
「昔歲、五穀登衍し、今茲、蚕と麦は善取あり。」と
あり、唐の章懷太子李賢による注に「五穀とは黍稷
麥麻豆なり」、また「登は成なり、衍は饒なり」と
ある^{61d)}。

十年夏四月戊子、詔曰：昔歲五穀 登衍、(夾
注) 鄭玄注周禮云：「五穀、黍、稷、麥、麻、
ホ也。」(校) 五穀黍稷麥麻ホ也 按：校補謂殿
本「ホ」作「豆」、與周禮原注合。登、成也。
衍、饒也、音以戰反。

和刻本では〈五穀、黍、稷、麥、麻、米也。〉と
「ホ」(豆)が「米」の字になっているもの^{61c)}もあ
る。

参考文献

- 1) 「食べ物の名数 (1) 五穀 (上) : 中国古典に見ら
れる五穀」, 森田潤司, 同志社女子大学生生活科学,
45, 90-99, 2012
- 2) 『日本国語大辞典』第 2 版, 日本国語大辞典第二
版編集委員会・小学館国語辞典編集部〔編〕, 小
学館, 2000
- 3) 『大辭典』, 下中彌三郎〔編・発行〕, 平凡社, 1935
- 4) 『医心方 卷三十 食養篇』, 丹波康頼〔撰〕: 榎
佐知子〔全訳精解〕, 筑摩書房, 1993
- 5) 『医心方』, 丹波康頼〔著〕: 正宗敦夫〔編纂校
訂〕, 現代思潮社, 1978
- 6) 『日本古代食事典』, 永山久夫, 東洋書林, 1998
- 7) 『日本古代穀物史の研究』, 鑄方貞亮, 吉川弘文
館, 1977
- 8) 『新訂増補 國史大系 第一巻上 日本書紀 前
篇』, 黒板勝美・國史大系編修會〔編〕, 吉川弘文
館, 1966
- 9) 『新訂増補 國史大系 第八巻 日本書紀私記:
釋日本紀; 日本逸史』, 黒板勝美・國史大系編修
會〔編〕, 吉川弘文館, 1932 再版

(注: 『日本書紀私記』は平安時代に行われた『日本書紀』の講
書の内容をまとめた書物である。『日本紀私記』ともいう。現存
するものとしては甲乙丙丁の四種が知られている。『新訂増補
國史大系』の底本は乙本に属し、「応永本」あるいは「御巫本

- (みかなぎぼん)」として知られる。末尾の奥書から、応永三十五年(1428年)に僧吉叟(八十一歳)が平野神社の伝本を書写したものとわかる。どの年代の講書の写本かは明らかではない。
- 10) a. 『倭名類聚鈔：椈斎書入』1巻・2巻，源順〔著〕；辻村敏樹〔編〕，早稲田大学出版部，1987／b. 『倭名類聚鈔』，源順〔著〕；正宗敦夫〔編纂校訂〕，現代思潮社，1978（注：底本は二十巻本的那波道圓〔校注〕「元和古活字本」）／c. 『諸本集成 倭名類聚抄 本文篇，索引篇，外篇』増訂再版，源順〔撰〕，京都大學文學部國語學國文學研究室〔編〕，臨川書店，1971（注：〔本文編〕は箋注倭名類聚抄，真福寺本（稲葉通邦摹刻本），元和古活字那波道圓本（二十巻本），高山寺本（史料編纂所古簡集影）を所収）／d. 『倭名類聚抄 天文本』源順〔撰〕；東京大学国語研究室〔編〕，汲古書院，1987（東京大学国語研究室資料叢書 第12巻）／e. 『倭名類聚抄 京本，世俗字類抄 二巻本』，東京大学国語研究室〔編〕，汲古書院，1985
- 11) 『古事記 祝詞』，倉野憲司・武田祐吉〔校注〕，岩波書店，1958
- 12) 『日本書紀①②③〈全三冊〉』，小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・藏中進・毛利正守〔校注・訳〕，小学館，1994-1998
- 13) 『新訂増補 國史大系 第二十三巻 令集解 前篇』，黒板勝美・國史大系編修會〔編〕，吉川弘文館，1966（注：令集解は868年頃に編纂された養老律令の注釈書）
- 14) a. 『重栞宋本周禮注疏附校勘記』，（漢）鄭元氏〔注〕；（唐）賈公彥〔疏〕（『十三經注疏附校勘記〔三巻〕周禮注疏』，〔清〕阮元〔校勘〕，中文出版社，1989所収）／b. 『重刊宋本十三經注疏附校勘記 重栞宋本周禮注疏附校勘記』，台湾中央研究院歷史語言研究所 漢籍電子文獻／所収／c. 『周禮』（永懷堂本），43巻，（漢）鄭玄〔注〕；（明）金蟠・葛鼎〔校〕（『和刻本經書集成 第六輯：古注之部 第二輯 周禮（永懷堂本）；儀禮；學記；孝經〔孔子傳〕；古文孝經（足利本）；孝經（開元御注本）；孝經御註譯義』，長澤規矩也〔編〕，古典研究會，1976所収）（注：『周禮』は，周王朝の理想的な制度について周公旦が記録したものと伝えられるが，實際の成立は戦国時代以降前漢の頃とされる。）
- 15) a. 『尊經閣善本影印集成 18 色葉字類抄一 三巻本』，前田育徳会尊經閣文庫〔編〕，八木書店，1999／b. 『尊經閣善本影印集成 19 色葉字類抄二 二巻本』，前田育徳会尊經閣文庫〔編〕，八木書店，2000／c. 『色葉字類抄』上・中・下，橘忠兼〔著〕；光棣〔写〕，早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収（注：1144年～1181年頃に成立，1827年光棣〔写〕）
- 16) a. 『新訂増補 故実叢書 禁秘抄考註（順徳天皇撰；牟田橋泉考註）・拾芥抄（洞院公賢撰；洞院実熙補修）』，故実叢書編集部〔編〕，明治図書出版・吉川弘文館，1952／b. 『拾芥抄』，清原業賢・清原國賢〔筆〕，京都大学電子図書館所蔵本／c. 『尊經閣善本影印集成 17 拾芥抄』上中下，洞院公賢〔撰〕，前田育徳会尊經閣文庫〔編〕，八木書店，1998（注：拾芥抄は鎌倉時代中期（1300年頃成立）に原型が成立し，南北朝時代の暦応年間に洞院公賢がそれを増補・校訂したと考えられている）
- 17) a. 『古本下學集七種研究並びに總合索引』，中田祝夫・林義雄〔著〕風間書房，1971／b. 『増補下學集』，東麓破納〔著〕；山脇道円〔増補〕；大友信一・木村晟・片山晴賢〔編〕，港の人，1999（注：影印版原本は国立国会図書館蔵本寛文9年刊，飯田忠兵衛他開板の複製版）
- 18) a. 『運歩色葉集 元龜二年本』，京都大学文学部国語学国文学研究室〔編〕，京大臨川書店，1969 b. 同京都大学附属図書館貴重資料画像所収
- 19) a. 『運歩色葉集 静嘉堂文庫蔵本』，白帝社，1961／b. 『中世古辞書四種研究並びに總合索引』，中田祝夫・根上剛士〔著〕，風間書房，1971
- 20) 『運歩色葉集 天正十七年本』，京都大学文学部国語学国文学研究室〔編〕，臨川書店，1977
- 21) a. 『改訂新版 文明本節用集研究並びに總合索引』（影印篇・索引篇全二冊），中田祝夫〔著〕，勉誠社，1979／b. 『雑字類書』，国立国会図書館デジタル化資料所収（注：〔雑字類書〕は書中に室町時代中期文明六年（1474年）とあることから文明本節用集とも呼ばれる。現存する節用集諸本のなかで最古の部類に属す写本とされる。）
- 22) 『改訂新版 古本節用集六種研究並びに總合索引』（影印篇・索引篇全二冊），中田祝夫〔著〕，勉誠社，1979
- 23) 『節用集；易林本』，与謝野寛・正宗敦夫。与謝野晶子〔編纂校訂〕，1926（覆刻 日本古典全集節用集〕，現代思潮社，1977所収）
- 24) a. 『庭訓往来 句双紙』（庭訓往来；山田俊雄〔校注〕，句双紙；入矢義高・早苗憲生〔校注〕，

食べ物の名数

- 実語教童子教諺解；覚賢恵空〔編〕；山田俊雄〔解説〕，庭訓往来抄（抄）；山田俊雄〔編〕，岩波書店，1996（注：『庭訓往来』の底本は天文六年（1537年）写山田俊雄架蔵本，『庭訓往来抄』の底本は静嘉堂文庫蔵神谷三園識語本（寛永八年〈1631年〉以前の写本）『庭訓往来』には底本の影印あり）／b. 『庭訓往来』，石川松太郎〔校注〕，平凡社，1973／c. 『庭訓往来注』，奈良女子大学 阪本龍門文庫善本電子画像集所収（注：室町末期書写）
- 25) 『名数語彙』本体・解説，古辭書叢刊刊行会〔編〕，古辭書叢刊刊行会，1973（注：室町末期写本）
- 26) 『清良記－親民鑑月集－』，土居水也〔編著〕；入交好脩〔校訂〕，近藤出版社，1970
- 27) a. 『合類節用集研究並びに索引』，中田祝夫・小林祥次郎〔著〕，勉誠社，1979（注：影印篇は国立国会図書館亀田文庫蔵 延宝8年本の複製）／b. 『節用集大系 第13・14巻：合類節用集』，大空社，1993
- 28) a. 『書言字考節用集研究並びに索引』（影印篇・索引篇 全二冊），中田祝夫・小林祥次郎〔著〕，風間書房，1973（注：原本は享保二年版の国立国会図書館岡田文庫蔵 題簽の書名は増補合類大節用集）／b. 『節用集大系 第81・82巻：和漢音釈書言字考節用集』，大空社，1995
- 29) 『本朝食鑑1』，人見必大〔著〕；島田勇雄〔訳注〕，平凡社，1976，東洋文庫296
- 30) 『大和本草』，貝原篤信〔原著〕；白井光太郎〔考註〕（第一冊），岸田松若・田中茂穂・矢野宗幹〔考註〕（第二冊），有明書房，1975
- 31) 『日葡辞書：邦訳』，土井忠生・森田 武・長南 実〔編訳〕，岩波書店，1980
- 32) 『國史大辭典』，國史大辭典編集委員会〔編〕，吉川弘文館，1979-1997
- 33) a. 『和漢三才図会18』，寺島良安〔著〕；島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳・下中 弘〔訳注〕，平凡社，1991，東洋文庫532／b. 『和漢三才圖會』，寺島良安〔編〕；和漢三才圖會刊行委員会〔編集〕，東京美術，1970
- 34) 『増訂 農業往来』，青松軒，1873（国立国会図書館 近代デジタルライブラリー所収）
- 35) 『増補 訓蒙農業往来』，橘慎一郎〔著〕，文江堂，1873
- 36) 『廣文庫』再版第七冊，物集高見，廣文庫刊行會，1925
- 37) 『類聚名物考（四）』，山岡俊明〔編〕，歴史図書社，1974
- 38) 『食の万葉集－古代の食生活を科学する－』，廣野 卓，中央公論社，1998
- 39) 『萬葉集 三』，佐竹昭広ほか〔校注〕，岩波書店，2002
- 40) 『奈良朝食生活の研究』，関根真隆，吉川弘文館，1969
- 41) 『正倉院文書』，『大日本古文書』編年文書所収（東京大学資料編集所奈良時代古文書フルテキストデータベース所収）
- 42) 『新訂増補國史大系 第二十六巻 交替式；弘仁式；延喜式』，黒板勝美・國史大系編修會〔編〕，吉川弘文館，1965
- 43) 「季節を祝う食べ物（1）新年を祝う七種粥と小豆粥」，森田潤司，同志社女子大学生生活科学，44，79-83，2010
- 44) 『農業全書』，宮崎安貞〔著〕；山田龍雄・井浦 徳〔監修〕；山田龍雄ら〔校注・執筆〕，農村漁村文化協会，1978
- 45) 『広辞苑』第6版，新村 出〔編〕，岩波書店，2008
- 46) 『本草綱目啓蒙－本文・研究・索引－』，小野蘭山〔著〕；杉本つとむ〔編著〕，早稲田大学出版部，1974
- 47) 『図説 草木名彙辞典』，木村陽二郎〔監修〕，柏書房，1991
- 48) 『雑穀－その科学と利用－』，小原哲二郎，樹村房，1981
- 49) 『圖書寮本 日本書紀 本文篇』，石塚晴道〔著〕，美季出版社，1970
- 50) 『東洋文庫蔵 岩崎本 日本書紀』，築島 裕・石塚晴通〔著〕；財団法人日本古典文学会〔編〕，貴重本刊行会〔財団法人日本古典文学会内〕，1978
- 51) 『新訂増補 國史大系 第一巻下 日本書紀 後篇』，黒板勝美・國史大系編修會〔編〕，吉川弘文館，1967
- 52) 『箋注倭名類聚抄』，狩谷掖齋〔著〕；京都帝国大学分學部國語學分學研究室〔編〕，全國書房，1943
- 53) 『和名類聚抄の文献学的研究』，林 忠鵬，勉誠出版，1992
- 54) 『重栞宋本禮記注疏附校勘記』，（漢）鄭元〔注〕；（唐）孔穎達〔疏〕（『十三經注疏附校勘記（五卷）禮記正義』，（清）阮元〔校勘〕，中文出版社，1989所収）
- 55) 『中国食物史の研究』，篠田 統，八坂書房，1978
- 56) a. 『和刻本諸子大成第八輯 呂氏春秋；（改正）

- 淮南鴻烈解；淮南子〔箋釋〕，長澤規矩也〔編〕，
古典研究會〔出版〕，汲古書院〔發行〕，1976／
b. 『呂氏春秋』，呂不韋〔著〕；楠山春樹〔訳
著〕，明治書院，1996. 7-1998. 11／c. 『呂氏春
秋』，高誘〔注〕；畢氏〔校正〕，早稲田大学図書
館古典籍総合データベース所収
- 57) 『五本対照 改編節用集（上）』 亀井孝〔案並
閲〕；高羽五郎〔校並刻〕，勉誠社，1974
- 58) 『節用集：天正十八年本』，白帝社，1961
- 59) 『増刊下學集；節用集天正十七年本』. 天理圖書館
善本叢書和書之部編集委員会〔編〕，天理大学出
版部・八木書店，1983
- 60) 『印度本節用集古本四種研究並びに総合索引』（影
印篇・索引篇全二冊），中田祝夫〔著〕，勉誠社，
1974
- 61) a. 『後漢書』，（劉宋）范曄〔撰〕；（唐）李賢等
〔注〕；（晉）司馬彪〔補志〕；楊家駱〔主編〕，台
湾中央研究院歷史語言研究所 漢籍電子文献資料
庫所収／b. 『後漢書 1-90』，范曄〔撰〕；章懷太
子〔注〕，早稲田大学図書館古典籍総合データベ
ース所収／c. 『和刻本正史 後漢書（影印本）
（一）帝紀・志・列傳（上）』，范曄〔撰〕；司馬彪
〔著〕；李賢〔注〕；長沢規矩也〔解題〕，古典研究
會〔出版〕，汲古書院〔發行〕，1972（注：長澤規
矩也蔵本の複製・縮刷版）／d. 『後漢書 第一冊
本紀一（卷一～卷五）』，范曄〔撰〕；李賢〔注〕；
吉川忠夫〔訓注〕，岩波書店，2001
(2011年11月9日受理)